

沼尻絳一郎編輯
西南太平記

十四号

上



10

15

20

25

30

A434
19

沼尻絰一郎編輯全二冊

西南太平記

東京

萬笈閣發兌

達乙第百十四號

今般西征從軍中昇級ノ者自然本營ト懸隔
 或ヒハ郵信不通等ニテ其宜旨辭令本人
 拜受ノ時日定例ノ順序ニ難運候條此度
 二限リ受書ノ日附ヲ不問宜旨辭令書
 ノ月日ヲ以テ俸給支給可致候條此旨相達シ
 候事

明治十年五月十七日

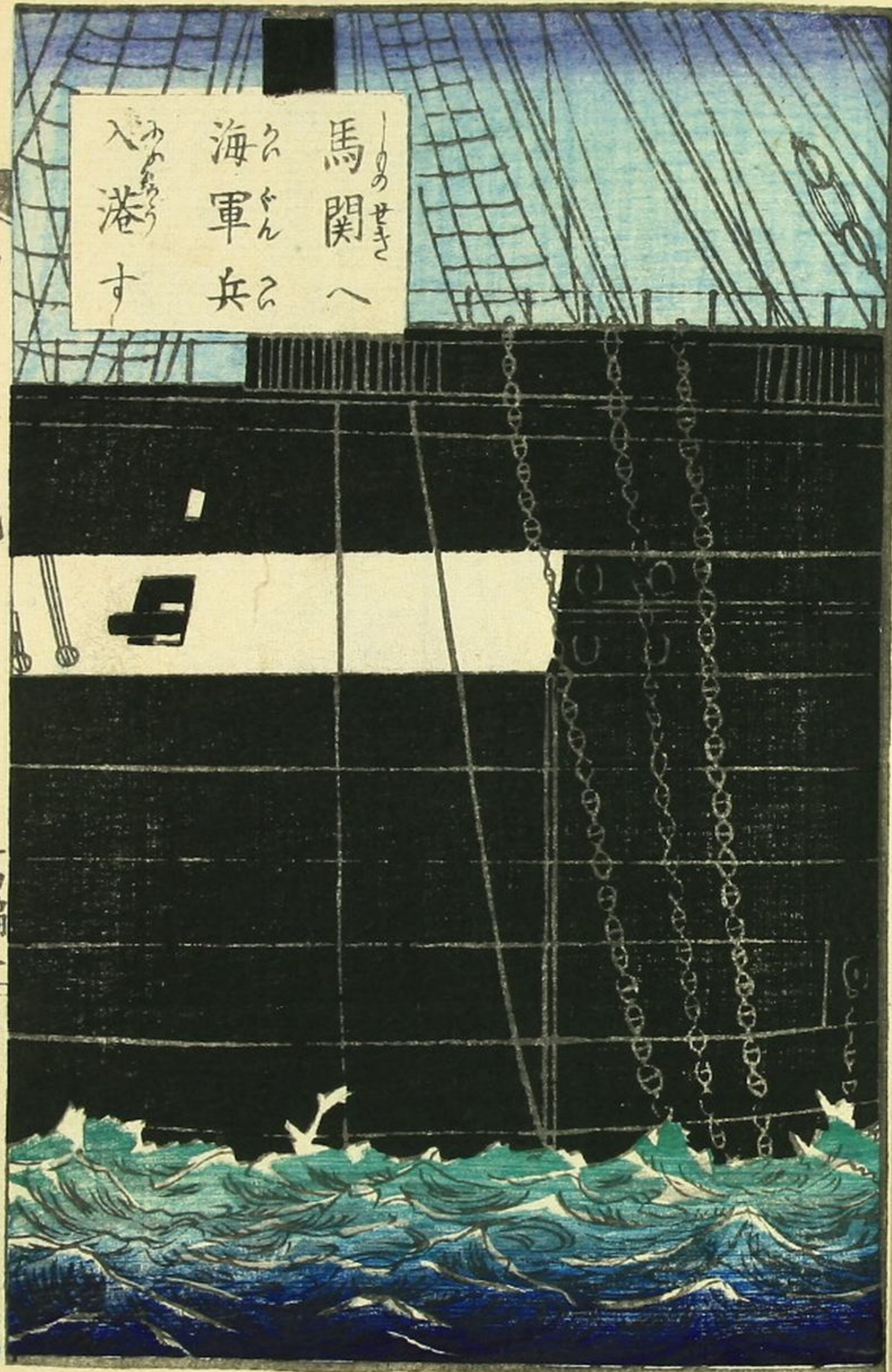
陸軍卿山縣有朋代理

陸軍少將井田讓

西南太平記

十四編上

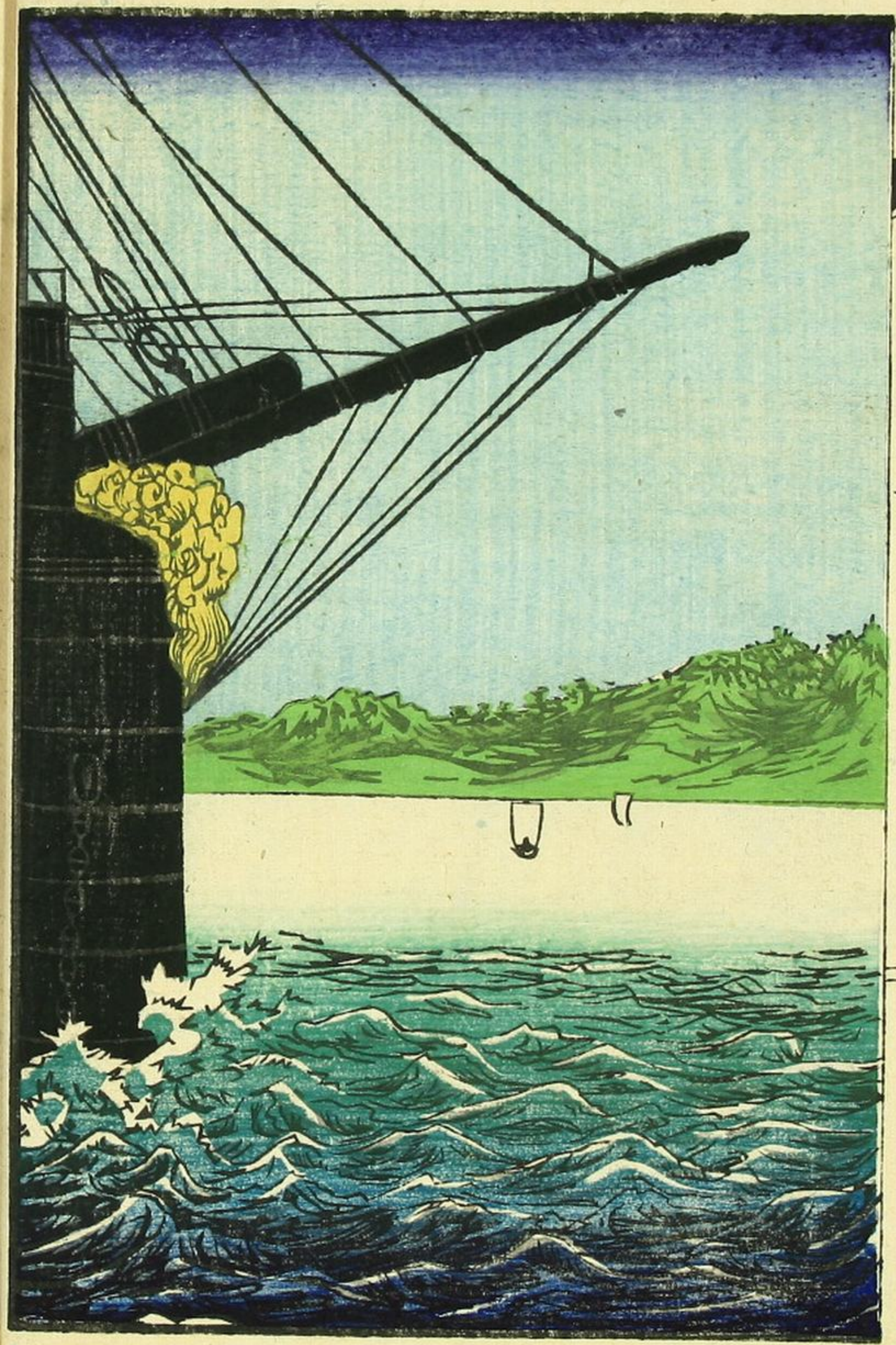
68-7802



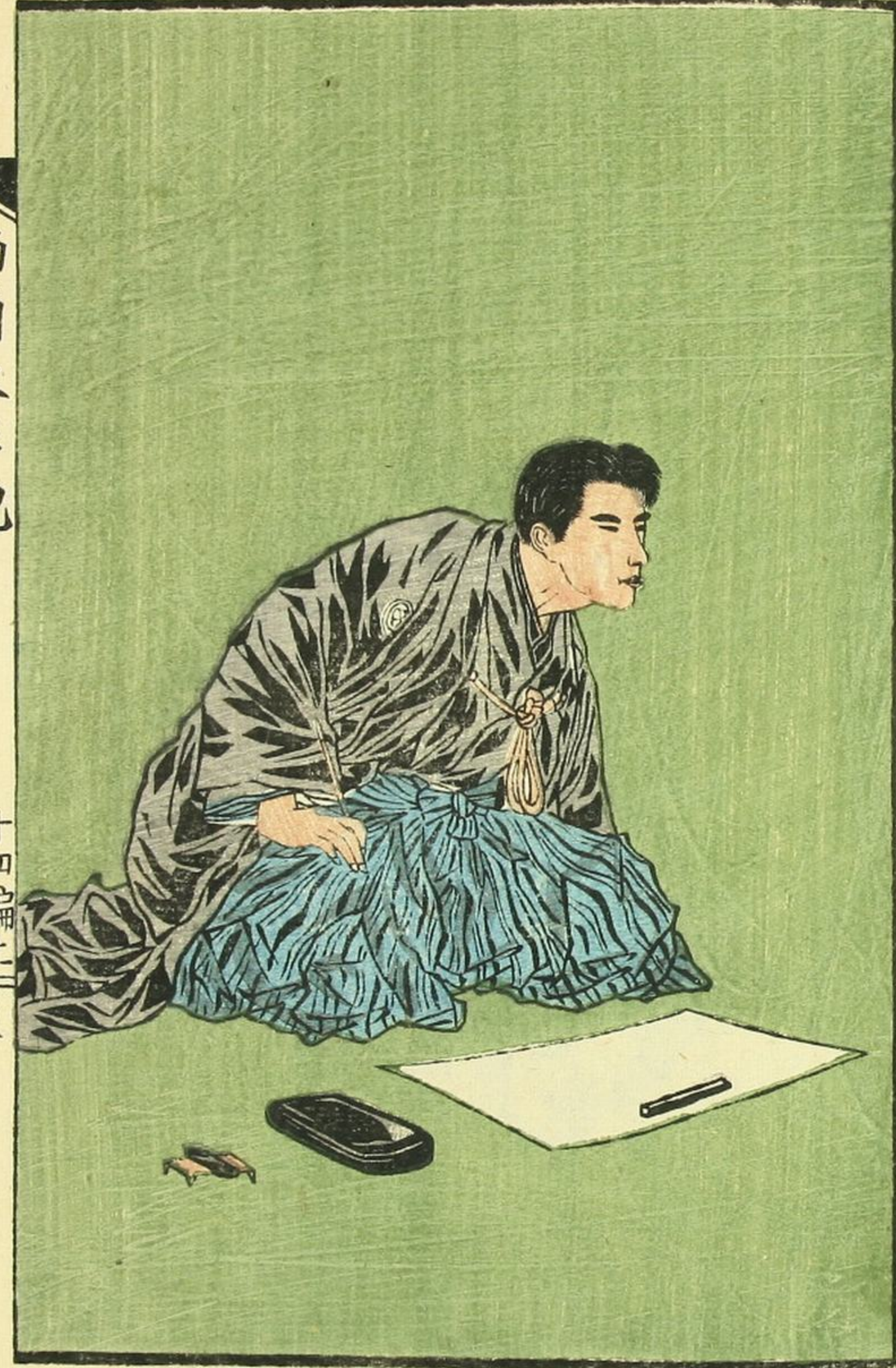
馬関へ
海軍兵
入港す

西南大平言

十四編上



西南大平言



山口の舊知事説
 諭書を認めり



伊集院達女



西南太平記十四編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第廿七回
柿田直樹逆徒と討取る
并 鶴寄へ官軍進撃す

夫れ國小兵亂ありや政府海陸二軍の常備あり
以て之と鎮定す護國の設け何ぞ欠く所有ら
んや然り而して國の將兵難あらんとす我が
郷土と護り我が安全を計る則ち人民たす

者已れの權利と保抄一以て國に報ゆるの當然の
務より復と多言と要せざる有り今や西陲の
乱あり肥後地方の如き人民山野に彷徨し其
愁状實に見るに忍びざる者あり偶々官の保
護より飢餓を免るべしと雖も官之を救護
せしめ則ち正税若干と消費する者なれば人
民の其救護と享るも誠と中心に屑しとせざ
るもの有り可し若し夫と其救護を受け以て

中心に満足する者有り之と卑屈なりと新す
るも亦と誣さる有り吾儕何ぞ此轍と踏む者
ならんや故に我が郷土人民と相謀り護郷の
兵を團結しりりて九州擾乱の勢ひ方又此土に
波及する者ありを戮力以て此郷土を守り我
安全を計らんと欲す亦止むを得ざるは出づる
者あり是を以て吾輩今正し用意するところ
有らんとせざるあり

護郷兵團結ふ付御届

此度九州の戦報御布達の趣拜見致候所
官軍勝利先以て安心致候得共勝敗ハ常々
らず時又賊日向路へ散乱致趣則ち我ガ郷
土と僅ろよ海水と隔候儀又付如何の暴逆
と受け候由難計就てハ則ち別紙音趣書
の通りと以て護郷兵團結の出願致度郷土
一團の人民公議の上ありてハ順序等も相立

がとき又付協議致度と存候間念の爲め此
段御届申候何卒私共愛國の至情御洞察
被成下御聞置有之度候也

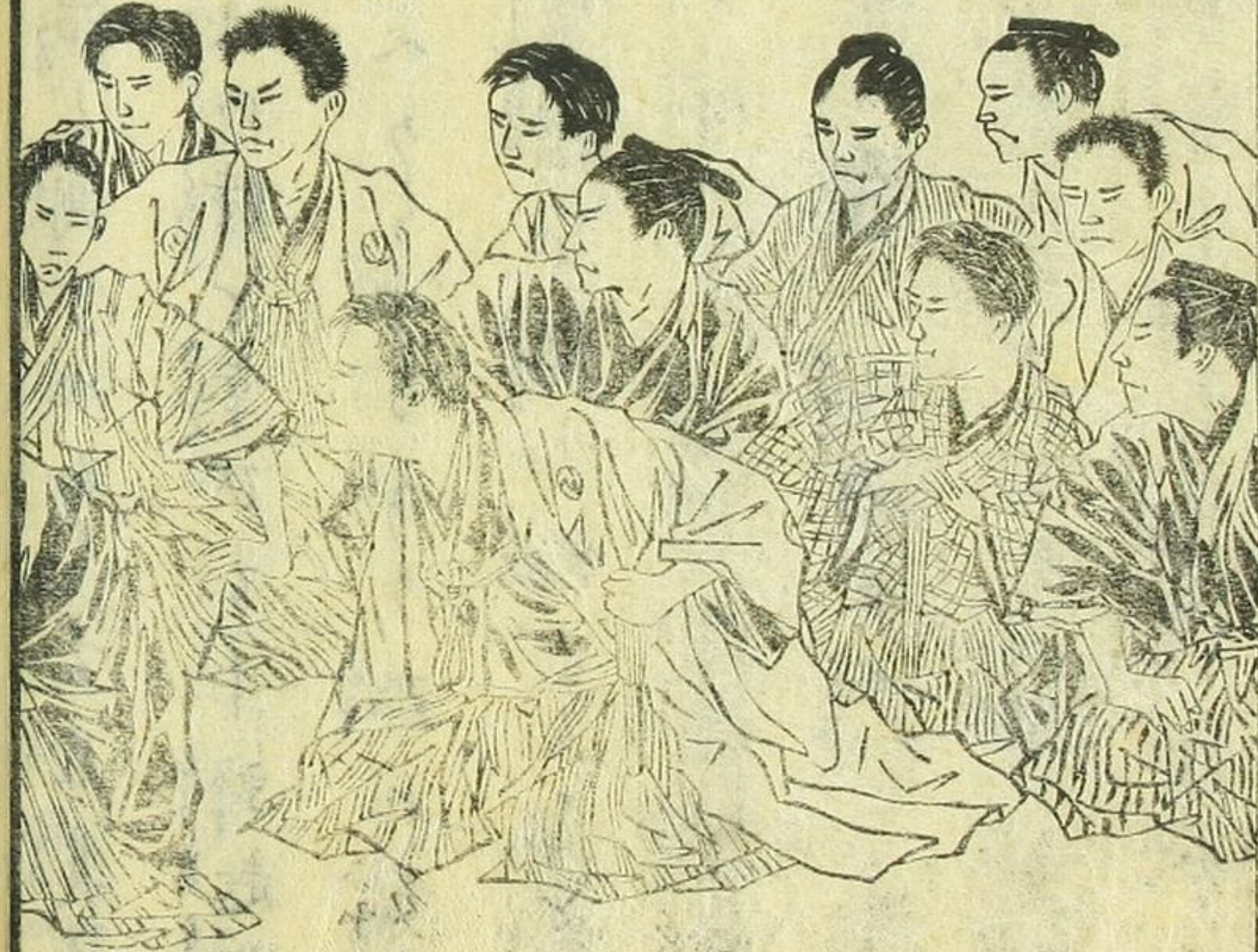
亦高知縣下の諸所又社と結び居るが何れも
益々盛んある景況又て立志社ハ総員凡一萬餘
人ありて前ふ社中に大議論起り一と腕力黨と
云ひ一と理窟黨と云ひ一時ハ二派又別れたれ
ども此項ハ議論一定して穩り又ありき阿波の

自助社よりハ左の告文と廣布せりし云ふ

鹿兒島士族反狀顕然^ニ及^ビ有栖川宮追討総督の命^ト奉^リ彼の地^ニ趣^キ既^ニ熊本縣^ニ於^テ接戦^ス及^フ聞^ク折維^新以来不平の徒^々乱暴^スす^レ人^々も皇威の向^ムと^シろ盡^ク之^ヲ鎮撫^セざる^ニ然^レれども今般該縣の拳動^ハや肥長反賊の比^ニあ^ラず既^ニ幾^万の黨^衆を結^スべ^リ其^山嶺^ニ

の及^フと^シころ殆^ト測^ルべ^カらず且^チ其他の地方頑固の徒^此の時^幸ひと^一蜂起騷擾するも亦知るべ^クらざ^ラり^恐れ^多くも皇帝陛下の宸襟^を惱^マし給^ハん^トと苟^モ臣民の義^と了解^スる者^豈坐視^傍觀^スす可^クけんや况^や士族の名稱^を冠^スる者^も於^テ依^テ來^ル三月三日洲本寺町本妙寺^に於^テ集會^シ以^テ我輩應分の報

高知縣下
の立志社
の議論起る



効を議せんと欲す諸君をも百事を擲て
來會せよ

明治十年二月

洲本自助社

又靖獻社の五千餘人ありて近ごろ立志社と
同意せりとまゝ北町の進取社江の口の一步社
の新地の憤起社水道町の方内舎木町の擴權
社と合併し自助社よりも數十名此の社中
加りり総負殆と二萬人に及ぶ其重立
人々あり有名の馬場意達伊藤勇岩川通徹
及び去年支那より歸り武田英吉等の諸子
あて其黨の二十歳前後の少年多くして何れも
皆民權黨なりまゝ近頃中立社の新設あり
か其人員日ふ加なり殆と九千人餘に及ぶ
去る二月に設立せし鳴動社の議論頗る激烈
あり故に幹事植木枝盛岩川進之助の二
子の其筋へ御呼出しあり博多郡の静

寄舎小高坂の愛身舎の敬神黨よて其社員
 三千人計りよて社長ハ盛岡勇馬大石勝弥太北
 川十五郎の三子りて縣下の諸社とも近頃
 稍穂の模様ありと既高知縣の士族ハ兼
 て民權論ハ熱心せし者ふて今般の事起るよ
 及で大ニ其氣力と盛んり立志社靖献社中
 立社杯の有志輩時々各所ニ集會し頗る激
 烈の論と發して曰く今や全國の民情未だ治

を思はず稍もまきをを騷擾し及ぶハ他あり二三
 の有司が獨り政務を專裁して人民政事上又關
 する權なきよ由れりと遂ニ數千百人同心戮力
 して大ニ為あつんとす右ニ付高知縣官中亦
 も種々の異論を生ト或ハ是と不平士族と
 見做し兵力を以て禍を未發ニ鎮壓すべしと
 或ハ然らず彼等の心底ハ兎も角も必ず兵力
 と用ふべからず事と平穏ニ治むべしと

論議一決一たりと然るところ該縣下立志社
て今般護郷兵と取立るところに茲は熊
本新聞の社員ふて柿田直樹とつゝ同縣
士族ふありて勇者の聞えあり入るるに鹿
兒島の兇徒が縣下へ乱入の時社員も一同
入城したるに此直樹とつゝの兼て警察官は奉
職してその心得もありまゝに非常の祈るれば
何事ありとも一臂の力を尽さんと懇願され

たる支ふてもありしに假し警察官と命せられ
いと見え同縣の懲役人若干を大分縣へ護送せ
よとの命をうけしが逆兵漸々城下を集まり
容易縣下を放れんは尤も難きとありしに夜中
竊り懲役人を率て城下を忍び出大分縣へ
首尾能く護送一引渡の務を果して再度縣下
へ立戻ると大津を過る折り由ありと逆徒の歸
りの路を塞ぎ待伏したりと聞より間道ふ

合入つゝ急々背後より多勢の者が追従るを危
 く遁れて小山豊島の麓より親戚某が方より駈入
 一が此家にて妻子をとどめ老人とも皆立退せ
 て主人一人残れる由を却て安堵の思ひと為
 一始終の景況を物語りて危き事ふて有りけ
 りと又間あらせざ一人の逆徒が来りて此家小
 巡査一人潜伏せしと確よ認め置きたれハ疾
 々我等より引渡すべしと頼りよ迫る由を今ハ

直樹も聞棄られず玄関さまへこの事出て弁解
 語をつくすとりんども逆徒の更よ承伏せず然
 らば兩人本陣へ来りて自身申立よイヤ忝らぬ
 との問答み逆徒も今の氣をりらち主人を目
 がけ技撃に斬つてかきを直樹の怒り躍り
 上つて刀をぬぎ採るその勢ひもや恐怖けん門
 外さして逃出る我主人が透さず組付て捻合ふ
 隙を窺て忽地逆徒を斬伏せ死骸と隠して



柿田直樹
逆徒と組
打す



叔云ふア初太刀の疵如何ぞや無事ニ此場
と遁きんと語と費し思はずも御迷惑を懸
まど懇尋ぬまじ否聊のかまきり傷ありきと
間ふ外の方騒がしくまきの逆徒が来り様子
さくを落んと裏口より倉嶽越の道もなき難所
と越え四日路の間飲食とたち辛くして豊後の
日田に赴きて警察所へ訴へ出遂に官軍の陣
と投し始りて蘇生の思ひとありを他と轉し

て居る家族等ハ兇徒の為め殺されしとの風
説あると心と学して猶よりくみ聞亂せば百友
口なる楠の大樹のゆきと引出されて日毎四五
人斬られし内は似寄の死骸の首りしなど皆由
る俣今もや世に無き人とありひ定めしより
紙位牌は香華を供へ追善の外無りしが熊本
城下の逆兵の解散したるその後無事みく
官より護送され兩人家へ帰りしなり

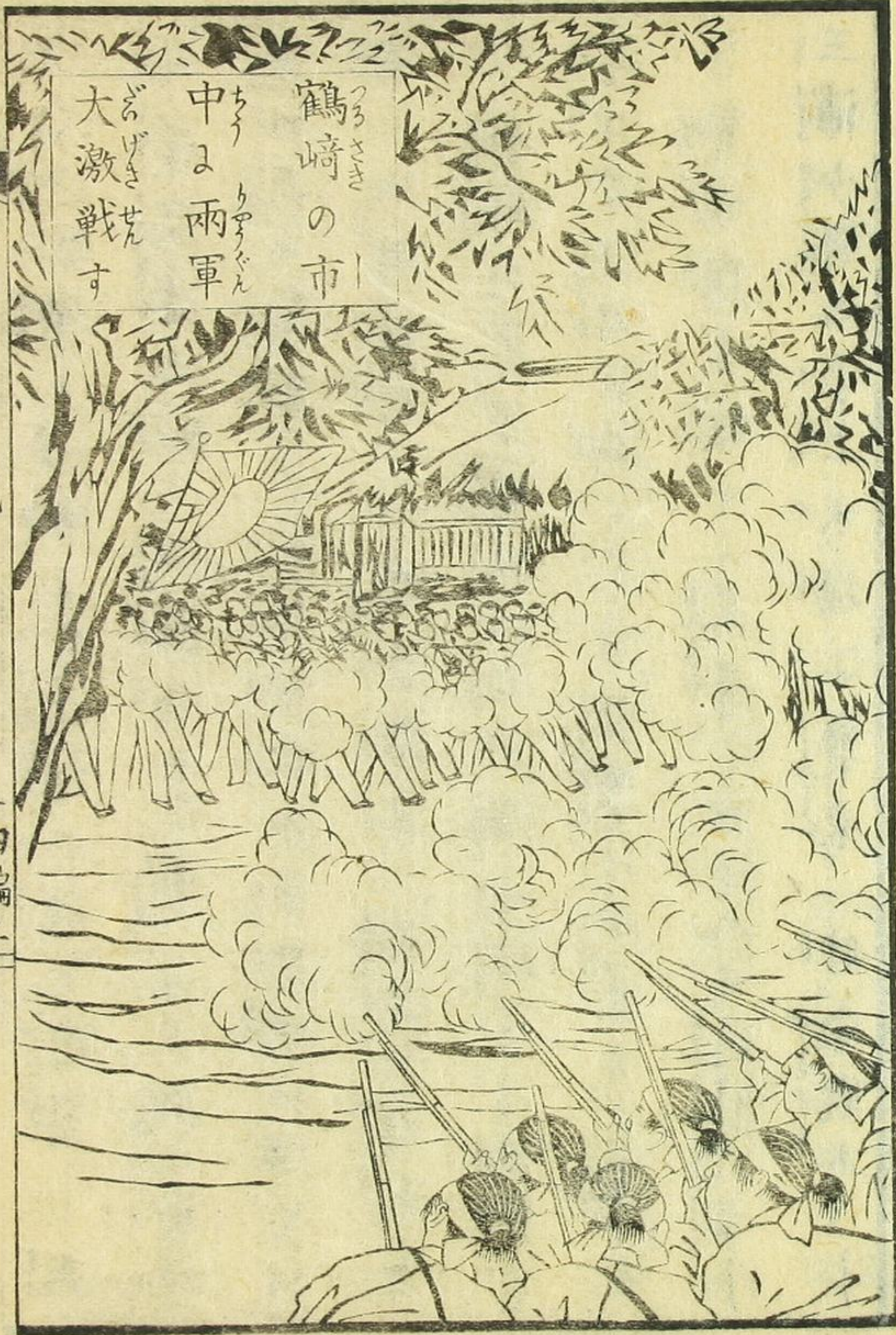
又大分縣下と縦横する兇徒へ鹿兒島の兇徒
 が来りて煽動せし又その地の士族
 郷士らとが集合したるものう竹田城屯集の逆徒
 の百五六十人志りて巨魁新空源吾といふ者
 頻り又士族と煽動されども應むるもの少
 と吹えしが五月十七日ふの鶴崎町の警察署と
 襲ひて巡查二名と殺傷一隊へ本廳へ向ひ
 一隊の佐伯へ廻り新兵を募るなど警報屢

来りしものから巡查并上陸したる海兵各所
 派出して戦ふなど多し又あつぬ逆兵の竹田
 城へ楯籠り防々とあまど烏合の兇徒あま
 日あらずして平定まべし又鹿兒島の兇徒が大
 分縣下と乱入せし過る十三日以後の事にて始
 めに重岡の警察分署と襲撃し續て用務所へ
 乱入せしが區戸長等の上納金と荷盤と納め
 近傍の竹林と潜匿れたるゆゑ其傍に立去り

たるが道よて再び暴徒ふ行逢ひ一由辛く一
 て遁れ走り今又行方と知らずとりの去る十三
 日の三重市へ襲来るとの事ふて既小暴徒二
 人が宿割よ来り一より中津支廳警視局の巡
 査百名の四方と警備一猶其の準備とありた
 りよ兇徒の直又道と轉トて竹田又入り士族
 迫りて隨從せ一の爰又始めて人数と倍一六
 七百人とりつて區裁判所警察署と乱暴あり

竹田城小扱て鶴崎又出まると弾丸又乏きよや水
 浦鑛山のふ向て鉛を奪つんとすとゆえたり竹田
 城とよひ市中の南方ふ在りて高さ三町をくり
 の山上又築き片が瀬と相並びよ要害最も嚴
 み片が瀬の山上と城とい南北相距る事十町を
 かりあり兇徒の鶴寄ふむりひたるも大分へ繰
 込むと進撃せし逆軍の最も精銳ありよ
 よて要害の地をよまは丈夫兵を分ちて弱兵を

鶴崎の市
 中よ兩軍
 大激戦す



五南大臣巳

十四編上
十七



五南大臣巳

以て之^{これ}に應^あつ四^よ方^{かた}より大^{おほ}砲^{ぱう}小^{せう}銃^{じゆう}を連^つ發^{ぱつ}し其^{その}砲^{ぱう}聲^{せい}萬^{まん}雷^{らい}の如^{ごと}く山^{さん}岳^{がく}為^なり震^{ふる}ふ至^{いた}る警^{けい}視^し隊^{たい}之^{これ}に應^あつ撃^げきし千^{せん}變^{べん}万^{まん}化^{くわ}し其^{その}黒^{くろ}烟^{えん}の隙^{すき}をバ
 潜^{ひそ}り此^{こゝ}所^{ところ}彼^か所^{ところ}より巡^{めぐ}査^さ數^{すう}名^{めい}の白^{しろ}刃^{やいば}を閃^{ひら}か
 け切^き込^こめたを逆^{さか}徒^との之^{これ}が為^なり破^{やぶ}きて敗^た走^{そう}
 退^ちひて竹^{たけ}田^でに扱^ありしが官^{くわん}軍^{ぐん}の小^こ倉^{くら}より死^しす
 と警^{けい}視^し隊^{たい}も追^お々^と來^き着^{ちやく}し同^{どう}十八^{じゅうはち}日^{にち}逆^{さか}徒^と大^{おほ}拳^{けん}
 三^{さん}浦^{うら}少^{せう}將^{じやう}の手^て上^{じやう}木^こ場^ばに襲^{しゆう}來^{らい}し一^{いつ}時^{とき}激^{げき}戦^{せん}ありし

が遂^{つい}に追^お拂^ひひ同^{どう}十九^{じゅうきゅう}日^{にち}又^{また}二十^{にじゅう}日^{にち}午^ご前^{ぜん}三^{さん}時^じ四^し十分^{ぶん}
 より同^{どう}人^{にん}手^て不^ふくマツ峠^{とげ}掃^は部^ぶ越^こへ進^{しん}撃^{げき}二^にヶ所^{ところ}
 とも陥^おされ生^な捕^と分^{ぶん}捕^と多^た分^{ぶん}あり同^{どう}廿^{にじ}五^ご日^{にち}拂^ひ曉^{きやう}我^{われ}
 兵^{へい}出^で水^{みづ}の矢^や筈^{はず}嶽^{がく}に登^{のぼ}り砲^{ぱう}壘^{らい}數^{すう}ヶ所^{ところ}を投^なぎ之^{これ}
 と占^しめたり去^さる十八^{じゅうはち}日^{にち}八^{はち}代^{だい}口^{くち}へ差^さし立^たたり矢^や澤^{ざい}
 軍^{ぐん}曹^{そう}山^{さん}田^{でん}少^{せう}將^{じやう}へ中^{ちゆう}村^{むら}にて面^{めん}會^{かい}し十七^{じゅうしち}日^{にち}の戦^{せん}ひ
 みて國^{くに}見^み山^{さん}の要^{えい}害^{がい}に扱^あり兇^{きやう}徒^とを攻^せめ落^おし十八^{じゅうはち}
 日^{にち}の平^{へい}瀬^せに進^{しん}撃^{げき}最^{さい}中^{ちゆう}総^{そう}て此^{こゝ}の地^ち方^{ほう}を深^{しん}山^{さん}

みこ意の如く大進撃へ行われずして處々より進
撃すするあり

三浦少将より陸軍省へ報知み曰く

五月十八日逆徒ガミコハハ襲来す開戦

中大関山より横撃す兎徒山上の壘を

棄て走る我兵兎徒の砲壘に扱りにて堅

く守る十八日午後川路の手より大斥候

と出し長尾山の背後より兎徒と襲ふ正

面より兵を進む兎徒狼狽死骸を棄て

走し小隊長熊寄左平次分隊長中満

善太郎を斃す又大口を通ずる本道よ

りも進撃深川より先二合計り大野と

云ふところへ討入り逆徒の壘二ヶ所を

乗り取りたりまると豊後に出したる兵

隊へ未だ開戦る一同十八日川路利良

自ら兵を率て長尾山の背後へ廻り兎

徒と砲撃し兇徒狼狽せり長尾山の西面
みある我が兵ハ此の機に乗ト進撃し兇
徒の死骸二十生捕一名銃器三十餘挺其
他彈藥器械多く分捕たり大口へ通ず
る本道の壘と守れる我が兵もまうこの
砲声と聞進撃し来りて大野にて我が
兵即死四名手負十名程あり去る十日
以来兇徒の襲を受け晝夜砲声止まざ

今日の一戦も賊膽を破り水俣と安んぢ
るのともなひ兵氣大に復するを得たり
警察愈嚴重す

同二十五日第一旅團みて小坂葛原岩戸の要
害を據る兇徒を落し三壘を取り三壘を眼
下に隠るところに於て守を付たりと云

西南太平記十四編卷之上 終

古詩

淡墨書法，內容模糊，似為詩文。

010190507764

